

〈研究ノート〉

ロシアから見た日本統治時代の台湾

— 帝政時代とソ連時代の比較 —

ワシーリー・モロジャコフ

要 旨

ロシアにおける台湾観測・研究の歴史は、日本海軍の出兵（1874年）から始まる。当初はロシア海軍の将校が、のちには学者と記者が台湾の地理、歴史、民族、言語を研究し始めた。日清戦争の結果として台湾が日本の植民地になってからは、ロシアの分析官がその調査・研究を続けた。

帝政時代における観測の重点は、経済（資源開発、農業、貿易）と共に軍事であった。一般的に言えばロシア側は、植民地としての台湾が日本の「宝物」になるのか、「厄介者」になるのか、日本の経済力と軍事力を強めるのか弱めるのか、を知りたがった。日露戦争以前、経済と軍事の両観測分野は同じように大事と考えられた。が、日露戦争直後、台湾の経済は軍事より興味深いと見られた。

1920年代には、日本の植民地はソ連共産党とコミンテルンの対外政策の焦点となった。日本を帝国主義列強と見なすソ連政権は、植民地に存在した経済・社会・民族問題及び本土に対する不満を利用する戦略・戦術を採った。対台湾政策はその試みの一つであった。

ソ連共産党とコミンテルンは、1923年のドイツ革命の失敗直後、アジアでの革命を世界革命の最も近い道だと論じた。そして、中国及び列強の植民地は革命的闘争と共産主義的活動の現場と見なされた。

日本統治時代の台湾の国内状態を分析・評価したソ連・コミンテルンの専門家は、直接的な情報の不足にもかかわらず、事実をかなり正しく理解したと結論できる。しかし、その専門家は、共産主義独裁政権の下、政権からの統制・弾圧を受けて、日本の台湾政策を激しく批判して、台湾における民族問題の重要性、労働・左翼運動の範囲、社会主義革命の可能性を過大に見積もっていた、と結論できる。

キーワード：台湾、ロシア、ソ連、植民政策、資源開発、民族問題

1. ロシアはいつ台湾を見つけたのか？

台湾という島は、ロシアにとって地理的にも歴史的にも遠い存在であった。しかし、ロシアとロシア人が台湾に関心がなかったと考えるのは、恐らく間違いであろう。

ちなみにロシアでも、第二次世界大戦の終りまで、欧米と同じように、「Taiwan」（「台湾」）の代わりに「Formosa」（「フォルモサ」）という呼称が一般的に使用されていた。

ロシア人が初めて台湾の土を踏んだのは、1771年、冒険家のモーリツ・ベニョヴスキー（Móric Benyovszky; 1746-1786年）の台湾上陸の時であった⁽¹⁾。ベニョヴスキーと一緒に旅行・冒険したイワン・リューミン（Ivan Ryumin）書記が執筆した詳細な記録の一部は、ロシア語での最初の台湾関係論文として知られている⁽²⁾。現在の台湾専門家の見解によると、リューミンは知識人・文人ではなかったが、ベニョヴスキー自身の偽造した「物語」と違って、旅行をかなり正確に記録した。しかし、ベニョヴスキーの台湾訪問は短期間だったので、リューミンの記録した台湾関係の情報は少なかった。

政治家で歴史家の竹越与三郎（当時衆議院議員）は、1907年に英語で『Japanese Rule in Formosa』（「台湾における日本統治」）と題する、日本の植民地としての台湾に関する詳細な研究論文を発表した。当時、台湾総督府民政長官であった後藤新平が序文を寄せている⁽³⁾。竹越の著作附録の、20ページ・数百件に及ぶ「台湾参考文献」にロシア人の著作は一件しかない。それは、帝政ロシア海軍のステパン・マカロフ（Stepan Makarov; 1848-1904年）提督の台湾海峡の水路学研究である⁽⁴⁾。しかし、竹越は誤ってマカロフ自身の著作ではなく、マカロフの著作に対するドイツ人海洋学者ゲルハルト・シュット（Gerhard Schott; 1866-1961年）が

執筆した書評を「台湾参考文献」に収録した⁽⁵⁾。帝政ロシアの海軍中将マカロフは、水路学の専門家としても知られていたが、その影響は主に海軍及び学界に限られていた。マカロフの名が世界的に知られるようになったのは、彼が日露戦争初期に戦死した直後のことである。

ロシアにおける日本研究の歴史を一瞥すると、日露戦争の影響が顕著に見られる。帝政ロシア、後にソ連から見た日本統治時代の台湾は、「中国事情・研究」の一部ではなく、「日本事情・研究」の一部とみなされた。

例えば、中国通のピョートル・スカチコフ（Petr Skachkov; 1892-1964年）が編集した詳細な目録『中国関係著作総目録——ロシア語の中国関係単行本・論文一覧、1730-1930』に収録された台湾関係著作は、中国本部関係著作としてではなく、「中国と日本」の節に入っている⁽⁶⁾。ところで、スカチコフのこの『中国関係著作総目録』には、満州関係著作が収録されたが、蒙古（モンゴル）及びチベット関係著作は収録されていない。結論として言えば、中国研究者としてスカチコフは、満州を中国の一部とみなしたが、台湾、モンゴル、チベットを中国の一部と見なさなかった。一方、ソ連時代に編集した3巻の『日本関係著作総目録』には、主に日本統治時代の台湾関係著作を収録している⁽⁷⁾。

ロシア科学アカデミー東洋学研究所台湾研究センター長ワレンティン・ゴロワテョフ博士と筆者は、ロシア語の日本統治時代の台湾関係資料・著作を総合的に研究した際、ロシアにおける台湾事情分析、台湾研究は、日本統治時代より長かった、と結論した⁽⁸⁾。

台湾に比較的長く滞在した最初のロシア人はニコライ・ティートウシュキン（Nikolai Titoushkin; 1850-c.1917年）であった。在日ロシア人歴史家ロマン・ザイツェフ博士の調査・研究によると、ティートウシュキンは1869年ごろから中国大陸（北京など）に勤務し、1873年から1875年まで台湾基隆市の税関事務所に勤めていた⁽⁹⁾。ティートウシュキンは税関事務に携わるかたわら、事務所に気象台を設置して、台湾史上初めて気象観測

を行った。ティートウシュキン自身は論文や記事を執筆しなかったらしいが、彼が観測した気象情報は当時の著作によく利用・引用されていた⁽¹⁰⁾。

多数のロシア語の専門的著作目録を検討した結果、台湾関係の最初の記事は、1874年に出た、明治政府の台湾出兵に関するニュースであった。1874年7月、帝政ロシア海軍大尉ウラジーミル・テレーニチェフ (Vladimir Terentyev; 1840-1910年) は、台湾を短期間訪問して、収集した情報に基づいて事務的報告書を準備した。テレーニチェフの報告書の一部は、1874年、帝政ロシア海軍の公式な新聞に掲載された記事「台湾とその島への日本人の出兵」⁽¹¹⁾として公刊されたが、報告書の原文はまだロシアの文書館で発見されていない。

ロシアにおける初めての詳細な台湾研究は、その翌年に始まった。帝政ロシア海軍尉官パーベル・イビス (Pavel Ibis; 1852-1877年) は、1875年1~2月に、一人で台湾島を歩いて、その先住民の言語、文化、信仰、日常生活、また島の地理と自然の関係データ多数を収集して、詳細な研究報告を執筆した。イビス著「フォルモサ紀行」は、1876年にロシア語で、1877年にドイツ語で専門的雑誌に公表された⁽¹²⁾。著者はエストニア人で、ドイツ語は第二の母語であった。ロシア以外でも読まれたこの論文は、現在でも学問的な価値が非常に高いと見られる。イビスの論文は、中国語訳、のちに日本語訳も出た。イビスは、ロシアにおける台湾研究の先駆者であったが、残念ながら1877年に、25歳の若さで亡くなった。現在、ゴロワテョフ博士はイビスの総合研究・評伝を準備している⁽¹³⁾。

2. 帝政ロシアは日本統治時代の台湾をどう観察したか

1880年代及び1890年代前半、ロシアでは台湾研究及び台湾関係の著作が殆どなかったが、日清戦争以降、台湾は、注目すべき地域の一つになった。

帝政ロシアは、日本統治時代の台湾に領事館を持っておらず、また常任代表者もいなかったが、複数のルートから様々な関係情報を収集して、その状態を観察していた。台湾が日本帝国の一部であったので、在日ロシア公使館（1908年から大使館）と領事館が台湾観察の中心になったが、それと共に欧米発、中国発の関係情報・資料も分析されていた。

ロシア側は、台湾について何を最も知りたかったのか？ 主要な関心は島の経済的能力であった。したがって、ロシアの外務省、財務省、通産省などの報告書及び雑誌の記事を含む台湾関係資料の内容は、島の資源とその開発、農林、漁業、通商を中心していた⁽¹⁴⁾。具体的なテーマは、樟脳（カンフル）油と樟脳精の生産、マッチ生産、鉄道の建設、阿片常習吸飲者の統制などであった。ところで、1903年に台湾を訪問したロシア人新聞記者で政治評論家のイリヤ・レヴィトフ（Ilya Levitov; 1850-1918年）の見解によると、台湾総督府が設立した阿片常習吸飲者に対する取締り制度は当時のアジアで最も進歩的、最も効果的なものであった⁽¹⁵⁾。

帝国としてのロシアは、島国である日本帝国及び英帝国とも、また欧州のフランス、ドイツ、オランダ、ポルトガルの「植民地帝国」⁽¹⁶⁾とも異なっていた。西洋の植民地帝国の場合には、本土と、本土から離れた外地・植民地との相違は、地理上だけでなく、主に政治、行政においてであった。一言でいえば、本土は帝国全体の中心であって、その地位は植民地とは全く違っていた。日本帝国でも、外地・植民地は「内地延長」と論じられたが、本土と植民地の地位が異なることは明白であった。

大陸帝国であった帝政ロシアの場合には、新たに開発された領土は、行政的に本土と不可分になったが、時には「国内植民地」とも言われていた。いわゆる「国内植民地」とは、帝政ロシアの政治エリートが一般的に「本土」と考えるロシア帝国の西部（「ヨーロッパのロシア」ともよく言われる）の経済発展のために開発されているシベリア、中央アジアの領土であった。帝政ロシア政府は、新領土において行政体制、法律体制、教育体

制などをロシア帝国全体と同様にして、ロシア語を国語、ロシア正教を国家宗教にしていた。

十九世紀後半から、特にコーカサスに勤めていた帝政ロシアの官僚は、キリスト教信者である現地人をほとんど例外なくロシア人と平等に見ており、またイスラム教信者である現地の貴族の高い地位も認めた。こうして、歴史的「本土」としてみなされたロシアの西部と新しく開発された東部・南部の差異は次第に消えていったものと結論できる⁽¹⁷⁾。帝政時代の有名なロシアの政治家セルゲイ・ウィッテ伯爵（蔵相・首相）は、その政策を最も正しい植民開発政策と評していた⁽¹⁸⁾。しかし、帝政ロシア政府は一九世紀末に植民地政策を転換して、「ロシア化」政策を積極的に行うこととなり、ウィッテはその転換を激しく批判していた⁽¹⁹⁾。

東シベリア、極東、沿海州などの積極的な開発が始まった十九世紀末から、ロシアでは外国の植民政策の経験への関心が高くなった。当時日本は植民地支配国としてまだ「新参者」と見られていたが、ロシアの専門家は台湾のケースにも注目していた。具体的に特別な関心が注がれた分野は、植民経営、現地教育体制、先住民との関係であった。そのような問題は、帝政ロシアの「国内植民地」でも存在したからである。

1909年にロシアでは、英語から訳された『日本人が見た日本』と題する論文集が出版された（英語の原題『Japan and the Japanese』は日本語原題『日本と日本人』の直訳である）。このよく読まれた著作は、当時の代表的な日本人専門家が、開国から半世紀にわたる日本の発展の成果を総括したもので、価値が高い資料集である。その中には桂太郎と後藤新平が執筆した「台湾」の章がある⁽²⁰⁾。この桂・後藤の論文から台湾事情を初めて理解したロシア人のインテリ読者は多かったと考えられる。

台湾の開発は、日本近代史における植民政策の最初の経験であったため、列強はその政策、その過程及び成果を注意深く観察した。特に「科学的植民政策」を行っている英国、フランス、ドイツでは関心が高かった。

新渡戸稲造、や後藤新平を中心とする日本の拓殖・開発政策の実現に参画した学者及び官僚は、英国（エジプトにて）とフランス（インドシナにて）の「科学的植民政策」の経験に基づいて、オリジナルな「日本的」植民政策を作る努力をしていた。後藤自身は、民政長官時代に、「台湾の総督府は拓殖・開発を勉強している学校で、総督は総長で、私〔後藤〕は理事長である」、とよく述べた。

日本帝国における台湾は、地域の拓殖・開発の実験室、テスト・スタンドで、台湾の開発は日本植民政策の最初の試験であった、と言える。1900年代の竹越与三郎の見解によれば、日本はこの試験に合格した⁽²¹⁾。

帝政ロシアの行政官と違って、学者の専門的な関心は別の分野にも及んだ。1908年の前半に台湾を4ヶ月間視察した医者・昆虫学者のアルノールド・モリトレフト（Arnold Moltrecht; 1873-1949?年）は、昆虫学と動物学ばかりでなく、台湾先住民の習慣、信仰、祭り、儀式、日常生活に関するデータを多数収集して、1916年に貴重な報告書を公刊した。モリトレフトは、自身の経験と印象ばかりを述べたのではない。総督府から様々な情報を受けていたことが、報告中の謝辞から伺える。彼は台湾における植民政策についてあまりコメントしなかったが、その「装置」一般をかなり「進歩的」と評価した⁽²²⁾。

1912・13年の冬、日本から台湾に来たセルゲイ・エリセーエフ（Sergey Eliseev; 1889-1975年）（東京大学卒業、後に世界的に有名な日本学者）は、植民経営体制を検討して、総督府の対先住民政策を批判した⁽²³⁾。学問的に見れば、広い意味の植民政策は、次第にロシアにおける台湾観察・研究の中心になっていった。

帝政ロシアでは、他国の植民政策に関する研究は比較的に少なかった。が、1917年のロシア革命直後からアジアにおける植民政策及び植民地における国民運動の調査・研究が急速に進んだ。それはなぜか？

3. ソ連とコミンテルンは日本統治時代の台湾を どう観察したか

ロシア革命指導者の主要な目的、或は夢は、全世界労農革命であった。1919年に創立されたコミンテルンは革命推進の準備に忙しかった。しかし、1923年秋のドイツ革命の失敗以後、欧州におけるプロレタリア革命はほとんど不可能であることが明白になったため、ソ連共産党・コミンテルンは、植民地を含む東洋を「世界革命の予備軍」と見なすことになった。それは多数の演説及び宣言から明らかである。

東洋における革命運動は、明らかに列強の植民政策に反対していた。その革命運動をより効果的に支持するために、ソ連政権とコミンテルンの首脳には、植民政策の多面的の研究が必要であった。ソ連は列強の植民地に領事館や代表部をほとんど持たず、現地の情報への直接的なアクセスもなかったため、公開資料から、または現地の共産主義者から情報を収集し、調査・分析していた。

ソ連は、1925年1月に、日本との国交を回復したが、台湾には領事館及び公式な代表者が一人もなかった。そして、現地との直接的なアクセスもなかったため、資料に基づく観察しかできなかった。「我らには、台湾国内状態についての情報が乏しい」、とあるソビエト評論家は認めている⁽²⁴⁾。唯一の情報への直接的なアクセスは、中国共産党関係であった。

1920～1930年代、ソ連における植民政策研究の主な課題は、植民地の行政・経営、その経済状態、農業、工業、貿易、資源開発と共に植民地における社会運動（ブルジョワ自由主義者、民主主義者、社会主義者など）、階級闘争（経済摩擦、ストライキ、労働組合活動）、列強に反対する民族闘争の過程と将来の可能性であった。

ソ連での植民政策の研究の主要な対象は、中国、インド、蘭印（現インドネシア）であったため、台湾の研究は戦間期には比較的少なかった。日

本統治時代の台湾では労働運動と労働組合が政治的に弱かったにもかかわらず、その状態と将来の分析はソ連における台湾研究の代表的な一部であった⁽²⁵⁾。それと共にソ連の専門家は台湾の農業問題、農民の状態と階級闘争を観察・研究していた⁽²⁶⁾。三つ目の主要な研究課題は、台湾における民族問題、特に1930年秋の「霧社事変」を中心とする先住民と日本人の紛争であった⁽²⁷⁾。

公式に「共産主義インターナショナルの日本部」と呼ばれた日本共産党の政策は、モスクワの政策方針に従ったものである。日本共産党は、1927年から「植民地の独立」というスローガンを掲げた。その意図するところは日本の植民地全ての独立であった⁽²⁸⁾。コミンテルン実行委員会が作成した文書「日本の総選挙に対して」（1930年1月）、「日本共産党の目的」（1931年6月）、「日本の状態と日本共産党の目的」（1932年3月）は、朝鮮と台湾を含めて「全ての植民地の独立性」をコミンテルンとそのメンバー共産党の一つの主要な目的として示した⁽²⁹⁾。1931年1月に作成されたコミンテルン実行委員会の文書「日本の資本主義の現在危機及び日本の将来革命の本質——報告案」は、「朝鮮とフォルモサにおける革命運動は進んでいる」と結論づけている⁽³⁰⁾。

満州事変勃発直後、日ソ関係が悪化した。それと同時にソ連共産党、コミンテルン、日本共産党のレトリックは過激になっていった。1933年のコミンテルン執行委員会総会で演説した「同志オカノ」（野坂参三の戦前期の主要な匿名）は、新しいスローガンを掲げた。それは、「支配されている全ての民族の解放！ 解放された国家の連邦！ ソビエト・中国、ソビエト・日本、ソビエト・インド、ソビエト・インドシナ、ソビエト・朝鮮、ソビエト・フォルモサ万歳！」であった⁽³¹⁾。一方、日本共産党から「転向」した佐野学と鍋山貞親は、日本植民地の独立に対するコミンテルンの政策を特に批判していた。「世界革命の参謀本部」と称されたモスクワのコミンテルン本部は、その発言を読んで激怒した⁽³²⁾。

4. 結論

結論として言えば、ロシアにおける台湾研究は、時代によって、すなわち時々の政権とその東北アジア政策によって違ったのである。日清戦争から日露戦争の終わりまで、帝政ロシアの分析官は、ロシアと日本との競争だけではなく、戦争の可能性を考慮して、日本の植民地になった台湾の経済力（資源開発、農業、貿易、インフラ）と共にその軍事力を調査していた。日露講和条約後は、日露戦争の可能性が低くなったので、帝政ロシアの分析官は主に台湾の経済力を検討していた。しかし、その分析・研究は、内容としても目的としても「プロパガンダ」ではなかった。

しかしロシア革命以後、ソビエト新政権とその対外政策の「武器」になったコミンテルンは、日本帝国を含めて「列強」をソ連の敵と見なしたので、日本の政治力を減衰するための政策を行った。そのため、日本の植民地としての台湾の国内状態を検討したソ連の分析官は、その経済力だけではなく、経済・貿易の摩擦、階級闘争、民族問題、民族紛争を中心にした。ソ連では、海外事情の分析・研究は、内容としても目的としても「プロパガンダ」であったので、台湾研究も例外ではなかった。ソ連の分析官は、日本植民政策の「影」だけを強調して、台湾での反日革命の可能性が高い、と結論して、その結論を読者に鼓吹していた。

戦後のソ連においても台湾研究は殆ど存在しなかった。植民地研究としての台湾研究の緊要性がなくなったためである。1949年以降、ソ連は中華民国を承認しなかったため、国民党政権とその政策に対してソ連の立場は完全に批判的であった。台湾研究は、政治的な理由でほとんど不可能になったのである。

ソ連は、中国共産党との闘争時代（1960～1970年代）にも「一つの中国」の立場を積極的に支持していたため、中華民国を存在しないものとし

て見なした。ポスト・ソビエトのロシアにおける台湾研究は、殆ど現在の政治、経済、経営、社会の研究に限られる。ロシア語の台湾関係著作・研究論文はまだ比較的が少ないが、学問的、専門的な水準はかなり高いと言える⁽³³⁾。

台湾の近代化における日本の役割は、学問的に重要な研究課題であるだけでなく、特に歴史認識において重要である。それ故、ロシアでも、日本でも、中国史・台湾史の専門家は日本史の専門家と共に今後それを再検討する意味があると思う。ロシアから見た日本統治時代の台湾は、興味深く重要な研究課題が多く、その歴史には新しい発見が可能である。

《註》

- (1) 詳細は、沼田次郎・水口志計夫編訳『ベニョフスキー航海記』（平凡社・東洋文庫、1970年）。
- (2) Berkh V. N., “Zapiski kantselyarista Ryumina o priklucheniyakh ego s Beniowskim” (*Severnyi Arhiv*. 1822. № 5-7)。(歴史家ベルフが刊行・編集した『ベニョフスキーに同行した冒険に関するリュウミン書記の記録』)。
- (3) *Japanese Rule in Formosa*, by Yosaburo Takekoshi, Member of the Japanese Diet, with Preface by Baron Shimpei Goto, Chef of the Civil Administration, translated by George Braithwaite (London: Longmans, Green, 1907)。
- (4) 竹越「台湾参考文献」に記載のママ：Kontr-Admiral S. Makaroff, “Die Hydrographie der Formosa-Strasse in ihrer Bedeutung für die praktische Schifffahrt” [出版社・出版年不明]。
- (5) 筆者は原文を閲覧する機会がなかったが、ロシア国立海軍文書館で保存されているマカロフ文書の中には、ドイツ語の紀要「Annalen der Hydrographie und maritimen meteorologie」（1894年）の抜き刷りとしてショットの論文が収録されている。
- (6) Skachkov P.E., *Bibliografiya Kitaya. Sistematischeskiy ukazatel' knig i journalnykh statey o Kitae na russkom yazyke, 1730-1930* (Moskva-Leningrad: Sotsekgiz, 1932) p. 230-237。(中国関係著作総目録——ロシア語の中国関係単行本・論文一覧、1730～1930年)。
- (7) *Bibliografiya Yaponii* (Moskva: Nauka, 1960, 1965, 1984)。(日本関係著

- 作総目録)。第1巻は1734~1917年、第2巻は1917~1958年、第3巻は1959~1973年に公刊したロシア語単行本・論文・記事・博士論文要旨を収録する。残念ながら、1974年以後のロシア語日本関係著作目録はない。
- (8) 詳細は、Golovachev V. Ts., Molodiakov V. E., *Taiwan v epokhu yaponskogo pravleniya. Istochniki i issledovaniya na russkom yazyke. Analiticheskiy obzor* (Moskva: IV RAN, 2014)。(日本統治時代の台湾。ロシア語の資料と研究 — 調査概論)。
- (9) 詳細は、Zaitsev R. V., *Pervyi russkiy rezident na Taiwane. Rekonstruktsiya biografii N.N. Titoushkina*。(台湾に滞在した最初のロシア人 — N. N. ティートウシュキン伝記の調査)。露文未公開論文。
- (10) 例えば、Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society, Vol. 12 (Yokohama-Hongkong-Shanghai: Kelly and Walsh, 1878) P. 206; MacKeown K., *Early China Coast Meteorology: The Role of Hong Kong* (Hong Kong: Hong Kong University Press, 2011) p. 11 (ザイツェフ博士の註)。
- (11) [無名] “Formosa i ekspeditsiya yapontsev na etot ostrov” (*Pervye yaponskie posol'stva v Rossii v gazetnykh publikatsiyah 1862-1874 gg.* (Sankt-Peterburg: RDK-Print, 2005)) p. 180-182 (台湾とその島への日本人の出兵)。
- (12) Ibis P., «Ekskursiya na Formozu» (*Morskoi sbornik*. 1876, № 1-2)。和文翻訳は、塚本善也訳「フォルモサ紀行」(『台湾原住民研究』8号, 2004年)。
- (13) その総合的研究論文の発表された一部は、Golovachev V. Ts., Kovalenko A. G., “Etnograficheskoye puteshestviye na Taiwan: novye dannye o P.I. Ibis” (Rossiya I ATR. 2017, № 4) p. 214-230。(台湾の民族的見学旅行 — 新しいP.I. イビス関係資料・情報)。
- (14) 関係著作一覧とその分析は、Golovachev V. Ts., Molodiakov V. E., *Taiwan v epokhu yaponskogo pravleniya. Istochniki i issledovaniya na russkom yazyke. Analiticheskiy obzor*, p. 24-32, 40-44。
- (15) Levitov I.S., *O neobkhodimosti opiyanoi reformy na Dal'nem Vostoke* (Sankt-Peterburg, 1906)。(極東における阿片[常習]改革の必要性について)。和文翻訳はない。詳細は、Golovachev V. Ts., Perminova V. A., “Zhurnal I.S. Levitov ob opiumnoi politike na Taiwane” (*Taiwan pod yaponskim upravleniem. Novye materialy I issledovaniya* (Moskva: IV RAN, 2016) p. 89-100)。(〔ロシア人〕評論家レヴィートフが見た台湾における阿片政策)。

- (16) フランスが1870年に共和国になった後でも、フランス人の政治家、政治評論家、ジャーナリストなどは、本土、外地、植民地を含める「empire」（帝国）という言葉を一時的に使用していた。
- (17) 帝政ロシアのアジア地域開発政策の総合的研究は少ない。詳細には、Abashin S.N., *Tsentral'naya Aziya v sostave Rossiyskoi Imperii* (Moskva: NLO, 2008)。(ロシア帝国の中の中央アジア)。
- (18) 新しい研究論文として詳細は、Korelin A.P., Stepanov S.A. *S. Yu. Witte – finansist, politik, diplomat* (Moskva: Terra, 1998) (S. Yu. ウィッテ — 財政家、政治家、外交家) ; Ilyin S. *Witte* (Moskva: Molodaya gvardiya, 2006) (ウィッテ評伝)。
- (19) Witte S. Yu., *Vospominaniya*, T. 1 (Moskva: Sotsekgiz, 1960) p. 39-44。(回想録)。
- (20) *Yapontsy o Yaponii. Sbornik statei pervoklassnykh yaponskykh avtoritetov.* (Sankt-Peterburg: Obschestvennaya pol'za, 1909)。(日本人が見た日本)。
- (21) Takekoshi Y., *Japanese Rule in Formosa, Chapter I.*
- (22) Moltrecht A. K., «Chetyre mesyatsa zoologicheskoi i etnologicheskoi raboty sredi dikarei Tsentralnoi i Yuzhnoi Formosy» (*Izvestiya Imperatorskogo Russkogo Geograficheskogo Obschestva*. 1916. T. 2, Vyp. 1)。(フォルモサ中・南部の未開人の中で行った動物学・民族学調査の4か月)。和文翻訳は未公開だが、以下の論文を参照されたい。塚本善也「旧植民地台湾を訪れたロシア人博物学者モリトレフト」(『異郷に生きるIV』(成文社, 2008年)。
- (23) Golovachev V. Ts., Perminova V. A., «Doklad S.G.Eliseeva o Formose v Obschestve Vostokovedeniya v Sankt-Peterburge (1915 g.)» (*Taiwan pod yaponskim upravleniem. Noveye materialy I issledovaniya* (Moskva: IV RAN, 2016) p. 101-128)。(サンクト・ペテルブルグの東洋学会におけるエリセーエフのフォルモサ報告(1915年))。和文翻訳は、塚本善也訳「エリセーエフ『フォルモサ報告』」(「天理台湾学報」25号, 2016年)。
- (24) [無名]«Formosa. Sakharnye plantatsii obagreny krovyu krestyan» (*Mezhdunarodnoe rabochee dvizhenie*. 1926, № 5) p. 13。(台湾の製糖農園は農民の血に染まった)。
- (25) [無名]Formosa. Rabochee dvizhenie (*Mezhdunarodnoe rabochee dvizhenie*. 1927. № 47) p. 12-14 (台湾の労働運動) ; [無名] Formosa. Dvizhenie v pol'zu obyedineniya rabochih soyuzov (*Mezhdunarodnoe rabochee*

- dvizhenie*. 1928. № 18-19) p. 22 (台湾における労働組合の団結運動) ; Asagiri, «Rabochee i natsional'no-osvoboditel'noe dvizhenie na Formose (*Mezhdunarodnoe rabochee dvizhenie*. 1929. № 34) p. 6-9 (台湾における労働運動と民族自由運動)。「Asagiri」(「アサギリ」;「朝霧」の意味か?)は日本学者マリヤ・ルクヤノワ (Maria Lukyanova; 1904-1977年)の変名であった。詳細は、ワシーリー・モロジャコフ「ソ連・コミンテルンのプロパガンダにおける日本植民地政策の批判——台湾を中心として」(国立台湾図書館編『台湾学研究』第20号(2016年12月) p. 111-129。
- (26) Pletner O., «K agrarnomu voprosu na Formose» (*Na agrarnom fronte*. 1927. № 5) p. 75-84 (台湾における農業問題) ; Aleksandrov V., «Formosa v tiskah yaponskogo imperialisma» (*Sovremennaya Yaponiya. Sbornik vtoroi* (Moskva: IMHMP, 1934)) p. 74-95 (日本帝国主義の支配における台湾) ; Gorshenin I., «Yaponskie kolonii» (*Yaponiya. Sbornik statei* (Moskva: Sotsekiz, 1934)) p. 129-131 (日本の植民地)。
- (27) Lukyanova M., «Yaponskoe vladychestvo i borba s nim na ostrove Formosa» (*Krasnyi international profsoyuzov*. 1929, № 6) p. 445-449 (台湾島における日本の支配と抗日闘争) ; Lukyanova M., «Vosstanie na Formose» (*Mezhdunarodnoe rabochee dvizhenie*. 1931. № 1) p. 16-18 (台湾における蜂起) ; [無名] «Vosstanie na Formose» (*Mirovoe sel'skoe khozyaistvo i krest'yanskoe dvizhenie*. 1931. № 1) p. 20-21 (台湾における蜂起) ; Petrovskiy V., «Vosstanie «dikarei» na Formose» (*Projektor*. 1930. № 34) p. 22-24 (台湾における「野蛮人」の蜂起)。
- (28) VKP (b), *Komintern i Yaponiya*, 1917-1941 (Moskva: Rosspen, 2001) p. 460 (ソ連共産党, コミンテルンと日本, 1917~1941年)。
- (29) VKP (b), *Komintern i Yaponiya*, 1917-1941, p. 494, 520, 523, 566。
- (30) VKP (b), *Komintern i Yaponiya*, 1917-1941, p.504。
- (31) Okano, «Yaponskiy imperialism i revolyutsionnaya bor'ba trudyaschikhssya mass Yaponii» (*Sovremennaya Yaponiya. Sbornik pervyi* (Moskva: IMHMP, 1934)) p. 25。(日本帝国主義と日本勤労大衆の革命的闘争)。原文ロシア語。
- (32) VKP (b), *Komintern i Yaponiya*, 1917-1941, p. 589, 600。
- (33) 戦後のソ連及びポスト・ソビエト時代のロシアにおける台湾研究について詳細に, Golovachev V.Ts., Molodiakov V.E., *Taiwan v epokhu yaponskogo pravleniya. Istochniki i issledovaniya na russkom yazyke. Analiticheskiy obzor*, p. 95-103。